



御幸ヶ原にあった五軒茶屋の一つ「依雲亭」



進修同窓会HPにアクセス

新体詩「修学旅行」

石川重房先生は、ご自身の筑波登山を歌に詠まれましたが(「筑波山」として作る長歌並短歌)、本紙第170号に掲載、生徒の村松孝治(中4回)も、1年生の時の筑波登山に始まる修学旅行を、新体詩「修学旅行」として、1901[明治34]年7月刊『進修第3号』に寄稿しています。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。引用文中の【 】は筆者による注記です。また、筑波山登山ルートを進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第171号3頁に掲載しています。

新体詩

新体詩とは、明治初期に西洋の詩歌の形式と精神とを採り入れて創始された新しい詩型で、主として、明治末期に口語詩が起る以前の明治文語詩を指します。多くが七五調で、¹⁸⁸²「明治15」年、外山正一らの『新体詩抄』に始まり、北村透谷・島崎藤村・土井晚翠などの作品によって流行し、明治30年代には隆盛期を迎えました。明治40年代に入り、自然主義の影響を受けた口語自由詩運動の進展とともに衰退しましたが、軍歌や唱歌などの原型を作り、日本人としての国民意識をも形作ったという点で、重要な役割を果たしています。

土浦中学生も、新体詩の流行につれてそれを作るようになったようで、『進修』誌上にも、『進修第3号』から¹⁹¹²「明治45」年4月発行の第15号までには、その頁が設けられ、生徒の作品が掲載されています。

1900 「明治33」年 1年生の修学旅行

『進修第3号』に掲載されている佐藤国之助(中4回)の「修学旅行記 波山水戸方面の記」によれば、1900年10月の1年生の修学旅行は、14日から18日までの、4泊5日の日程で実施されました(…徒歩、…鉄道、…汽船)。

- 1016 立田校舎⁰⁴⁰⁰…真鍋…常名…藤沢…下大島…大形…小田…北条尋常小学校(昼食)…神郡…白井…¹⁴⁰⁰筑波泊宿…筑波山神社…白滝…館山…茶亭…弁慶七戻り…胎内潜【くぐり】…雷神窟…北斗岩…女体山…五軒茶屋依雲亭…男体山(昼食)¹²⁰⁰…椎尾…薬王院…真壁…¹⁷⁰⁰橋本旅館泊
- 橋本旅館⁰⁸⁰⁰…町内伝習所…伝正寺…白井…下小幡…上小幡…東飯田…上、下大曾根…雨引観音…愛宕山(愛

- 1017 岩神社)…岩瀬駅¹⁵⁰⁰…笠間駅…笠間稻荷門前宿泊
- 宿⁰⁷⁰⁰…笠間駅⁰⁷³⁰…水戸駅…那珂川…祝町…大洗神社…大洗海岸(昼食)…【那珂】湊町…磯前【いそさき】神社…那珂湊恵比寿楼泊
- 1018 恵比寿楼⁰⁷⁰⁰…湊公園…水戸…弘道館…常盤公園…常磐神社…好文亭…水戸駅…¹⁹⁰⁰土浦駅

交通機関がまだ十分には整備されておらず、歩くしか方法がなかったのですが、それにしてもよく歩いていきます。毎日、「歩く会」をやっているようなものです。修学旅行とはいえず、軍事教練、鍛錬の意味合いも込められていました。日清戦争を経て、次はロシアとの一戦だとの思いが、生徒たちにもあったようです。

新体詩「修学旅行」

第1年級 村松孝治

緑の木々はあけ【朱・緋】にそみ【染み】
山田の稲穂黄金なし【為し】
此処【こゝ】や彼処【かしこ】の庭木立
実りし柿は麗しく
菊も漸々【ようよう】笑顔して
秋風そよぐその時に
我が土浦の中学は
実地を究むる為めにとて
遠足旅行を催さる
盛なる【さかりなる】かや愉快なり
待ちに待ちたる十四日
未だ夜深【よぶか】の丑三つころ^註
雨はしとどと降り来るに
勇気たちまち一倍し
校【立田校舎】に昇れば三四人
かざり火たいて待ち構ふ
やがて一同つどへれば
古々【こゝ】に各々列を成す
全級合して五百人^註
ひびく喇叭【ラッパ】のその音に
吾々同級一年は
筑波路さして進み行く
泥濘脛を没しつづ
常名藤沢小田を過ぎ

北条町に着ける時
腹は空しく足勞れ
古古【こゝ】北条小に午餐を終りてぞ
これより尚も励み行く
漸く筑波の山本【山の麓】に
達せし時は未【ひつじ】頃^註
雨は全くしづまりて
雲ははれ行く夕日影
富士と筑波と相對し
千里の眺望只一目
やがてくれぬる其よひは
討論など【など】に過しけり
あくれば十月十五日
明のからすも聞けばこそ
喇叭の聲に驚いて
床を蹴たてて見渡せば
朝日に輝く富士の峯
所々の民家に立つ烟
こ古の景色の有様は
筆にも画にも尽きすまし【まじ】
宿を出て【出で】山路を
のぼりて下る十町余
流れも清く森影に
岩より岩へ落つる水
砕けつ散りつ面白し
こゝが名にあふ【含む】白滝ぞ
之より最も峻路【険路】なり
勇めや勇めもろともに
耐へよ忍べよ此坂を
のぼれや上れいざ上れ
ひるみたゆむな許斯り【かばかり】「斯許り」
が正しいと
えい訓声揚げ【揚げ】て攀ち【よじ】ぬれば
あたりにな高き力餅^註
古れより弁慶七戻り
流石に猛き法師さへ
心おくれやしたりしと
古き昔は忍は【忍ば】るゝ
かくて漸く女体山
登り尽して大岩に
腰打ちかけて眺むれば
霞か浦や牛久沼
利根絹川【利根・鬼怒川】も近く見ゆ
遙か東に太平洋
惜しくも此処を後にして
之より天の浮橋を

渡りて下る三四町 餅店につきて夫婦【ふうふ】餅かゞげし額は依雲亭藤田小四郎此山に籠りし時に書て又差し添へ以ちて彫りしとかいでや登れや男体と最とも嶮しきがんくつ【岩窟】の急なる坂を辛うじて登りつめたるかひもなく之より直に下りみち真壁をさして行く途中椎尾村の薬師堂【椎尾山薬王院】結構いとも麗しく側に聳ゆる大伽藍四面は彫刻美事なりこゝより出でて大道を軍歌に勇みはげみつゝ着きしは真壁の町なるぞ此地の学校教員は我等を迎へて懇ろに湯茶よ菓子よと饗せらる日ははやくれて橋本の旅館につきて足洗ふ次の十有六日には朝まだきより晴れわたるいてや【いでや】此地の産物と羽二重織や陶器物中にも名高き紫山堂忝く【かたじけなく】もかし古くも東宮殿下へ献納の花瓶一對うるはしく菊と桐とのみしるしは尊敬心を起さしむ天目山は伝正寺雨引観音愛宕山いづれも風雅優美なり午餐をすまして早急げ三時の汽車に遅るなど岩瀬をさして馳【はせ】て行く千里の馬も皆【ただ】ならず【ず】疲れはひとしほまさりけりつくや間もなく打乗りてまたゞく隙【ひま】に笠間駅名高き稲荷のやしるにて暫しの間憩ひけり

狐狸にかたまる笠間町利欲の外に余念なく情も知らぬ宿々に一夜をわかす【あかす】の誤植【もいと憐れあくるその日は神嘗【神嘗祭】の佳辰【かしん】に国旗のちらつくは吾等を送るこゝろなり朝日にかがやく汽車の窓何時しか水戸に達しけりおりて名高き那珂川の汽船に乗りて百色の山見て下れば祝町砂路を蹴立て馳せ行けば此処が名に負ふ大洗神社【大洗磯前神社】の前に打集ひこし打かけて眺むれば石と石との間より波は躍りて雪と降る古ゝにて午食を喫ひ【くい】終り皆もる共に磯に出で貝を拾ひてわめくあり蟹を捕へて遊ぶありやかて【やがて】帰りは海門橋渡れば宿は【那珂】湊町またもや出でて磯前の酒列【さかつら】神社に詣でけり社は古木森々と天を掩ひて薄暗くさながら穴に入る心地之より浜辺をたよりてぞ帰りつきたる恵比藤はこゝに名高き宿屋なり喇叭の声は嚙々【りゅうりゅう】と夢を破りて中【中旬】の八日は早や波に映りつゝのぼる景色の東雲に床を蹴たてゝ起きあがり覚江【おぼえ】ず愉快とさげびけりいよいよ此日は帰り路に向ふとなればいざさらば此処の公園【見んもの】と連れ立ち行きて見渡せば東は大海西は山茲に【湊尋常】高等小学【校】の庭に聳ゆる老松は古れぞ名に負ふ烈公【徳川斉昭】が

手自ら【てずから】植ゑしと云ひ伝ふ斯くて出船を促せば眺もつきぬ那珂川を汽船に乗りて逆上る水戸に着きしは辰【たつ】の刻【刻】弘道館や諸学校県庁或は裁判所三公園の一つなる世にも名高き偕楽園あたりに植ゑし梅林幾千万の数しらず中に聳ゆる好文亭大なる竹の床柱此処をはなるゝ一町余寒水石の筒井筒【筒】噴き出る水は最【も】と清しやがて蒸気に打乗りてまたゞくひまに千波沼【茨城県農学校の】農学生の新刈や諸々の景色を眺めつゝ土浦駅に着ける時日も早や入りて薄晴【「暗」の誤植】しこゝに一同整列し軍歌の唱へ勇しく校に帰りて万歳を三唱してぞ別れける思へや思へ此旅行五日の辛苦は何なるぞ百度きくよりたゞ一度見るに如かずと諺に下を見よとはひがごと【僻事】ぞうへ【上】見て励め学びてよいざやまくる【負くる】な何事も堪へて忍び【忍び】て怠るな坂に車を於す【押す】譬へ油断をするな我友よ互にはげみはけまさ【励み励げまさ】れ疾く【とく】なし【為し】上げて楽しんで酔ひては面楼【欄】の欄に凭れ【よれ】醒めては総理の権握れ愛国心を忘るなよ孝行心を等閑る【おこたる】な忠義は日本の特色ぞ光のどけき春の日や月影清き【さやけき】秋の夜やさみだれ晴れぬ夏の日も

雪降りしきる冬の夜も智識をみがく時なるぞ学べや学べ吾友や学べや学べ吾友よ愉快なるかや愉快なり

① 丑三つごろ
今の午前2時から2時半

② 全級合して五百人
旅行当時、まだ5学年は揃っておらず、実際に500人はいなかったが、定員は500人と定められていたので、村松はこのように詠んだと思われる。

③ 未【ひつじ】頃
今の午後2時頃

④ えい
力をこめた時に発する掛け声。

⑤ 力餅
弁慶七戻り近くの「弁慶茶屋」で販売していた餅で、「弁慶の力餅」として有名であった。

⑥ 公園
「黄賓閣跡(湊公園)。水戸藩第2代藩主徳川光圀公の命により、1698、「元禄11」年に建てられた水戸藩別邸の跡で、1968、「昭和43」年に市の史跡に指定された。

⑦ 辰【たつ】の刻
午前8時頃

⑧ 寒水石の筒井筒
寒水石は茨城県北部から産出する結晶質石灰岩(大理石)。筒井は円筒状にまっすぐに掘り下げた井戸で、筒はその井戸の枠(井桁)。偕楽園のこの井戸は、「吐玉泉」と呼ばれている。

⑨ 面楼
絵に描いたような、美しく装飾された楼閣

翌1901年にも、1年生が、10月6日から筑波・大洗方面に出掛けていますが、以後、筑波山方面は修学旅行のコースではなくなり、1年生のは、主に県北(水戸・大洗・常陸太田・日立)方面となりました。これは、土中生にとつては、筑波山は身近な山であり、ほとんどの生徒が筑波登山を経験していたことによるものと思われます。

(高21回 松井泰寿)

アカンサス 171号 筑波山登山コース

筑波山塊地図

(明治44年発行 一部修正)

筑波山名所絵図(下)

